

《眼科臨床エキスパート》 知っておきたい屈折矯正手術

吉村長久, 後藤 浩, 谷原秀信, 天野史郎 シリーズ編集
前田直之, 天野史郎 編

屈折矯正手術は眼科の中で極めて特異な位置を占めており、外から見ると眼科を象徴するような手術であるにもかかわらず、一般の眼科医からは非常に遠い手術である。何より自分で屈折矯正手術を行っている医師が圧倒的に少ない。それにもかかわらず、LASIKをはじめとした手術の広がりによって、日常臨床の場で一般の眼科医が屈折矯正手術に関連した患者さんに接する機会がどんどん増えており、術後の患者さんの経過観察や、手術を希望する患者さんの相談に応じなければならない。そういう状況の中で、本書のような屈折矯正手術を網羅的にまとめた本が出版されたことは大変時宜にかなうものである。

本書は、極めて実践的に、屈折矯正手術の現状をまとめた本であり、書いてある通り行えば、明日にでもできるのではないかと思われるほど具体的に実際のやり方をまとめている。屈折矯正手術を現在行っている人にも、これから始める人にも大きな指針となるのではないか。手術の場合、つい手術そのものにだけ注意が行きがちだが、本書では、術前の適応や術後の処方・経過観察についても多くのページが割かれている。例えば、サーフェスアブレーションやクロスリンクングのパートは際立ってわかりやすい。また、オルソケラトロジーではレンズごとに解説が成されている。一部に詳し過ぎるがために、あまりに専門的だったり（トーリック眼内レンズでの波面センサー使用など）、たくさんの方が列挙されていてかえって迷わされたり（LAISK 眼の IOL 計算など）するところがあるものの、実践書として非常に高いレベルにある。

また、屈折矯正手術には欠点もあり、それも十分に

記載されているところが、本書の信頼性を高めている。よく読むと、Epi-LASIK や LASEK にはあまり意味がない（結局は PRK と同じ）ことがよくわかる。最新の方法である SMILE にも種々の知られざる欠点があることも述べられており、クロスリンクングの屈折矯正効果は期待できないこと、さまざまなタイプの角膜混濁を生じることもわかる。「多焦点レンズは、利点と欠点を有するレンズ」との記載があるが、これは非常にニュートラルな表現で、本書の特徴をよく表したフレーズである。

また、屈折矯正手術に関連した眼鏡処方、コンタクトレンズ処方、近視予防などについても網羅されており、ところどころには含まれた「一般眼科医のための患者説明のポイント」とともに、一般眼科医のことも十分考慮された内容となっている。

本書によって、「もう“知らない”では済まされない屈折矯正手術」の「必須の知識」が多くの眼科医に伝わればと思う。ただ、非常に実践的で先進的な内容であるだけに、出版された瞬間からどんどん古くなっていくうみがあるので、これだけの充実した内容だけに何年かごとに改訂されていけばと思う。言い換えれば、改訂版を求めさせるだけのクオリティのある本ということになるのである。

鳥取大教授・視覚病態学 井上幸次

B5・頁 432 2014 年

定価：本体 17,000 円＋税

[ISBN978-4-260-02037-4] 医学書院刊